

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷八十第

號念記年百二誕生スミス・ムダア

口繪 スミスの肖像・筆蹟・國富論初版扉・記念會寫眞

スミスの生涯・．．．．． 經濟學博士 本庄榮治郎

道徳的價值判斷に關するスミスの思想・ 法學士 恒藤 恭

富國論の研究方法に就きて・．．． 法學博士 財部 靜治

スミスとコンデアックとの價值論・．． 法學博士 田島 錦治

スミスの所謂「眞實の價格」について・ 法學博士 河上 肇

スミスの價格論と分配論・．．． 經濟學士 谷口 吉彦

スミスの自然主義觀と自由政策の見地・ 法學博士 河田 嗣郎

スミスの自由放任論の特徴・．．． 經濟學士 堀 經夫

スミスの自由貿易觀・．．．．． 法學士 作田 莊一

スミスの對植民地策・．．．．． 法學博士 山本美越乃

スミスの租稅原則・．．．．． 法學博士 神戶 正雄

スミスの公債論・．．．．． 法學博士 小川郷太郎

スミスと浪漫派經濟學・．．．． 法學士 山口正太郎

スミスの名其生涯及其學說等を早く我國に傳へたる蘭文經濟書・ 商學士 武藤 長藏

書目 スミス關係書目(細目裏面を見よ)  
記事 スミス記念會記事・．． 經濟學博士 本庄榮治郎

## スミスの價格論と分配論

谷 口 吉 彦

### 目 次

- 一、價格論及び分配論の地位
- 二、分配の方法及び比例と價格論
- 三、價格の構成部分と分配論
- 四、結 論

### 一 價格論及び分配論の地位

『諸國民の富』の第一篇は、國富の根源たる勞働の質的狀態を規制する條件に就いて、研究せるものであつて、アダム・スミスの經濟理論に於ては、最も重要な部分を占むるものゝ一である。而してスミスに従へば、勞働の質的狀態を左右する諸條件の中、最も重要なものは分業である。従つて第一篇に於ては、勞働の生産力を増大せしむる最大條件として、最初の三章に於いて分業を論じ、之を以つて所謂生産論を構成した。併し乍ら、分業に依る生産——富の社會的生產——

は、それ自身に於て成立し得るものでない。社會主義的社會に於ける共產制か、資本主義的社會に於ける交換制か、公有制度に伴ふ配分制か、私有制度に伴ふ賣買制か、是等の制度と共存することなくしては、分業は社會的生産の樞軸たり得ないのである。然らば資本主義的經濟組織に絶對の權威を認めたスミスが、分業論に引續いて交換を論ずるに至つたことは、極めて自然であらう。

彼れは謂ふ、『分業が一度完全に成立する時は、人の欲望の極めて小なる部分のみが、彼れ自身の労働の生産物に依つて充足され得るに過ぎぬ。彼れの労働の生産物の中で、彼れ自身の消費を超過する剩餘部分をば、他人の労働の生産物の中で彼れの必要とするが如き部分に對して、交換することに依つて、彼れは欲望の遙かに大なる部分を充足する。かくの如くして、各人は交換に依つて生活する。即ち各人は或程度に於て商人となつて來る。……併し乍ら、分業が最初發達し初めた時には、此の交換の力は、大に其の作用を妨害せられ、錯亂されねばならぬ……』<sup>1)</sup>

かくて物々交換に伴ふ不便を論じたる後、『かくの如き状態の不便を避くる爲めに、分業の最初の成立以來、社會の各時期に於て』交換を容易ならしむるの方法——貨幣の發明——が、自然に起り來ることを謂ふ。即ちスミスに従へば、生産力進歩の原因としての分業の發達は、交換制の發達に依つて條件づけられる。マルクスが其の『經濟學批判』に於て、『個人的交換が、分業

1) Wealth of Nations, Bk. I, Ch. IV, (Cannans' ed. Vol. I p. 24)

を意味することは眞理であるが、分業が個人的交換を意味すると主張するは誤謬である』と批評せるが如く、交換は必ずしも分業を條件づけるものではないが、而し資本主義的經濟組織を以つて、一個の自然現象と觀じたスミスは、分業論より延いて、交換方便としての貨幣を論じ、更に進んで、交換制に伴ふ所の現象——交換價值又は價格——の研究に入る。曰く「貨物と貨幣、若くは貨物相互の間に交換をなすに當り、人々が自然に守る所の諸法則は何か、余は進んで吟味せんとする。是等の諸法則は、貨物の相對價值若くは交換價值と謂はるゝ所のものを決定する」と。交換價值即ち價格なるものは、交換制に即して存在するものであり、既に分業と交換制とを以つて不可離の關係に在るものと觀たる以上、貨幣論に續いて價格論を取扱ふは、蓋し當然であらう。元來貨幣及び價格に關する問題は、今日普通に交換論の一部として取扱はるゝ所なるが、此點はスミスに於ても亦同様であつて、然るが故に其は分業論に引續いて攻究せられたのである。唯スミスの交換論に就て注意すべきは、其が生産論と對等の地位に於て分立せるにあらすして、分業論に附屬し、生産論の一部門として存在するの一事である。是れ彼れの研究に於て、交換なるものが、直接には顯著なる注意を喚起せず、また交換論なる名目が、彼れの著述に於て發見せらるゝ能はざる所以であらう。

2) Karl Marx, Critique of Political Economy, p. 68.

3) Wealth of Nations Bk., I, Ch. IV, p. 30.

緒て、國民の富の第一條件たる労働の質的狀態と、其の第二條件たる労働の量的狀態との研究は、彼れの理論の主要なる部分を構成するものなるが、此の二つの研究——第一篇及び第二篇——は、何れも富の生産に關するものなることが、先づ注意を要する。即ち彼れの根本思想を展開したる經濟理論は、大體に於て生産論に屬すべきもので、分配論は、理論上これなかるべき筈である。殊にスミスにあつては、一個の經濟體としての國民が、全體として、或は富裕となり或は貧窮となることを問題としたのであつて、國民各個人の間に貧富の懸隔を生ずることは、彼れにあつては多く問題とならなかつた。蓋し彼れの思想に従へば、個人の富の集積は社會の富であり、各人の富は國民一般の富を成すものなるが故に、今日の實際に觀るが如き、國民全體としては富裕を極むるも、大部分の國民各個人としては、貧窮に苦しむといふ状態は、彼れの殆んど注意せざりし所であつたからであらう。即ち此の點より見るも亦、彼れの經濟理論は主として生産論であるべく、其の政策は主として生産政策であるべき筈で、分配論及び分配政策は、彼れの論策の正系には、これなかるべき筈であると考へらるゝ。

然るにスミスは其の著の『緒論』に於て、第一篇の論題に就て述べて謂ふ、『労働の生産力に於ける此の進歩の諸原因、及び労働の生産物が、據つて以つて社會の種々なる階級及び状態の人々の間に、自然的に分配さるゝ所の順序が、此の研究の第一篇の題目を成す』と。次いで彼れは

4) *ibid.* Introduction and plan of the work. p. 2.

又、第一篇の冒頭に於ても、殆んど之と同じ意味の標題を掲げて居るが、是等によりて見れば第一篇に於ては、生産論と共に、若くは生産論と對立して、分配論をも論議すべきことを暗示して居る。キヤナン教授も此の點を指摘して、『初めて「諸國民の富」を識るに至つた所の讀者は、第一篇の標題に依つて、其が二つの部分——第一は勞働の生産力を取扱ひ、而して第二は其の生産物が分配さるゝ所の方法を取扱ふ部分——に分るゝを見んと、自然に豫期させらるゝであらう。然るに讀者の期待は、各章の標題を通觀するに及んで弱めらるゝであらう』と謂ふ。今試みに、第一篇各章の標題に就て觀る時は、第一章より第三章に至る最初の三章は分業論に屬し、第四章より第七章に至る四章は、貨幣及び價格を論じ、第八章より第十一章に至る最後の四章に於て、勞賃利潤及び地代が論せられて居る。勞働の質的狀態を論ずると彼れ自ら謂ふ所の此の第一篇に於て、本論の分業論に引續き、貨幣及び價格が論せらるゝに至りし所以に就ては、既に述べたる所なるが、然らば最後の勞賃利潤及び地代——所謂分配問題——が、如何なる意味に於て此の篇に存在することゝなりしか、以下此の點に就き吟味せんとするものなるが、兎も角『諸國民の富』の緒論及び第一篇の標題、並びに各章の標題を一瞥したる所では、分配論は、此の篇の主要なる題目として、生産論と離れて獨立に存在するであらうと想像せしむるに足るものがある。果して然らば、此の事——第一篇が生産論と分配論より成るといふ事——は、余が曩に述べたる所より

5) Cannan, Theories of production and distribution, ch. VI. § 1 pp. 185-186.

觀て、甚だ奇怪とすべきもの、様に見える。蓋し彼れの根本思想より展開されたる經濟理論は、大體に於て生産論に限らるべきものであつて、分配論は理論上これなかるべき筈であるから。

偕て、分配論に屬する勞賃利潤及び地代に關する研究が、如何なる意味に於て第一篇に存在することゝなつたか？此の點を吟味するには勢ひ彼れの價格論を一瞥せねばならぬ。價格論に於てミスが問題としたるは、『第一に、交換價値の眞實の尺度は何か、若くは總ての商品の眞實の價格は何に存するか、第二に、此の眞實の價格が構成され、若くは作り上げらるゝ所の種々なる諸部分は何か、最後に……商品の市場價格若くは實際價格が、其の自然價格と謂はるゝ所のものと、正確に一致することを妨ぐる所の諸原因は何か』の三問題なるが、分配論と關係あるは、此の中の第二及び第三の問題である。即ち價格の成立及び變動に關する問題を研究したる結果、自然に分配論に進入したるもので、價格論の一部として分配問題が論せらるゝに至つたのである。

今右の次第をミスの言葉に就て論證せんに、彼れに従へば、『あらゆる社會に於て、あらゆる商品の價格は、結局是等(勞賃利潤及び地代)の何れか一つ若くは總てに分解せらるゝ。而してあらゆる進歩したる社會に於ては、三部分の總てが、多少に拘らず、商品の遙かに大なる部分の價格の構成部分を成す』ものであつて、或る商品の價格が、是等三部分の各々の自然率に従つて支拂ふに足るものなる時は、其は其の商品の自然價格である。而して自然價格そのものは、其の各構

6) Wealth of Nations, Bk. I, Ch. IV, p. 30.

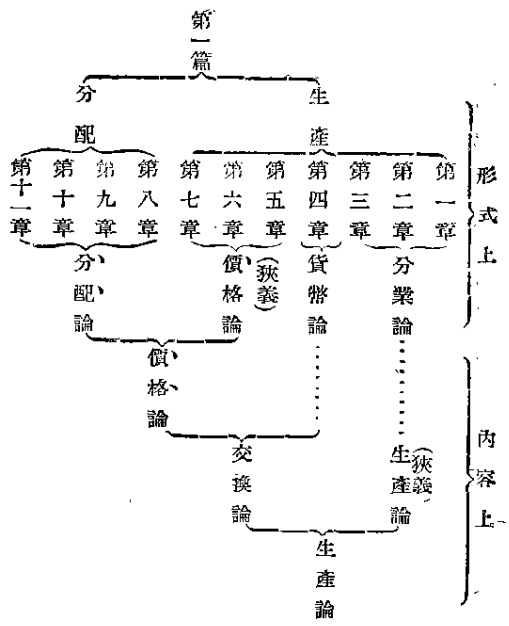
7) ibid., Bk. I, Ch. VI, p. 52.

成部分の自然率と共に變化する。而して『あらゆる社會に於て、此の率は、社會の境遇に從つて……變化する』ものであつて、『是等種々なる變化の原因をば、出來る丈け詳細且つ明瞭に説明せん』としたものが、即ち第八章以下の所謂分配論と稱せらるゝ部分の内容を成すに至つたのである。既に商品の價格は、勞賃利潤及び地代の三部分に分解せらるゝと考へたるスミスが、價格に就て更に立ち入りたる説明をなさんとせば、勢ひ是等の三部分に就て詳論すべきは當然であり、從つて此の部分の研究——即ち分配論は、價格論の連續であり、且つスミスの趣旨よりすれば、其は實は分配を論じたものではなくて、自然價格變動の理法を究めたものである。是れ彼れの分配論が、直接には價格論の一部を成し、間接には生産論に包含せらるゝと做す所以である。

要するに『諸國民の富』に於ては、分配に關する問題、即ち勞賃利潤及び地代に就ては、比較的詳細に論議されては居るが、而し其は分配問題として獨立の目的を以つて研究されたるものではなくて、他の問題に附隨してその一部として論せられたものである。而して此の事は、既に述べが如く、スミスの理論からは、極めて當然のことの様である。かくの如くして、スミスの所謂分配論は、標題の上に於て形式上は極めて重要な獨立の地位を占むるに拘らず、本文の上に於て内容上は單に附隨的地位を占むるに過ぎずして、之に分配論としての意義を與へて居ない。以上の所論に從つて、第一篇を表解するならば、次の如きものとなる。

8) *ibid.*, Bk. I, Ch. VII, p. 65.9) *ibid.*, Bk. I, Ch. VII, p. 65.





## 二 分配の方法及び比例と價格論

姑くスミスの意圖を離れて、假りに分配に關する彼れの論議を以つて、其の分配論となすならば、其は分配に關する如何なる問題を論じたるものなるか？分配の方法か、比例か、若くは分配の内容をなすべき實體を論じたるものか？此の點に就き、彼れ自身の謂ふ所に從へば、『第一に説明せんと努むる所は、勞賃の率を自然的に決定する所の諸事情は何か……第二に示さんと努

むる所は、利潤の率を自然的に決定する所の諸事情は何か』第三に各産業間に於て勞賃及び利潤の相違する『比例を左 する所の總ての種々なる事情』<sup>11)</sup>最後に『土地の地代を左右する……諸事情は何か』<sup>12)</sup>といふ問題、要言せば、資本主義的社會に於ける勞賃利潤及び地代の自然率が如何なる事情に依つて決定せらるゝかの問題である。即ち分配の比例を論ずるものであつて、此の事は、更に是等各章の内容に依つて實證せらるゝのみならず、既に述ぶる所の彼れの理論に於ける分配論の存在理由よりして、當然に然るべきものである。

然らば分配の方法若くは過程に關する問題は、スミスの全く看過したる所であらうか？既に述ぶるが如く、『緒論』及び第一篇の標題には、『勞働の生産物が、據つて以つて社會の種々なる階級及び狀態の人々の間に、自然的に分配さるゝ所の順序』なる文句を發見するが、此の『分配さるゝ所の順序』なるものは、分配の方法若くは過程を意味することは明らかである。然し乍ら、スミスが、明瞭なる意識の下に、かゝる特別の意義を附したるかは疑問であつて、彼れが指示したと想はるゝ部分は、分配の方法を論ずるものではなく、却つて分配の比例を論ずるものなること、既に述ぶるが如くである。果して然らば、彼れは茲に、二重の矛盾を免れざることゝなるが、此の點は姑く別問題として、彼れは所謂彼れの分配論以外の場所に於て、分配の方法に就て、注意すべき論議を試みて居る。彼れは第一篇第六章に於て、『商品の價格の構成部分に就て』<sup>10)</sup>

10) *ibid.*, Bk. I, Ch. VII, p. 65.

11)

12)

べたる後、此の章の後半に入つて謂ふ、「個別的に考ふるならば、あらゆる特定商品の價格若くは交換價值は、是等の三部分（勞賃利潤及び地代）の何れか一つ若くは總てに分解さるゝのであるから、そこで総合的に考ふるならば、あらゆる國家の勞働の年々の全生産物を成す所の總ての商品は、同様の三部分に分解されねばならぬ。即ち國家の種々なる住民の間に、或は勞働の賃とし、或は資本の利潤としてか、若くは土地の地代として、分割され且つ分配されねばならぬ。あらゆる社會の勞働に依つて年々に蒐集され生産さるゝものゝ全體、若くは同じ事である所の其の全價值は、此の方法に依つて根源的に其の社會の種々なる成員の間に分配さるゝ」と。<sup>13)</sup>此は疑もなく、分配の方法を論じたものであつて、彼れに従へば、商品の價格が三部分に分解さるゝことに依つて、社會の富は、先づ勞働者資本家及び地主の三階級に分配さるゝのである。即ちクラークの所謂 final division を論じたもので、group division 及び subgroup division に就ては、スミスの未だ考へ及ばざりし所である。<sup>14)</sup>

かくの如くして分配の比例及び方法に關する論議は、何等形式上の連絡なく、個々獨立に論述されて居て、両者の中間に『自然價格及び市場價格に就て』論ずる第七章が介在し、その所論の結果として、第八章以下は、分配の比例を論ずるにも拘らず、價格論の一部として存在することゝなつたのである。併し乍ら、既に述ぶる所に依りて明らかなる如く、両者は共に『價格の構成

13) *ibid.*, Bk. I, Ch. VI, p. 54.

14) Clark, *The Distribution of Wealth.*

部分』なる共同の源泉よる流れ出でたる二支流であつて、分配の方法が論ぜらるゝに至りし理論上の原因も、分配の比例が論ぜらるゝに至りし理論上の原因も、等しく價格の構成部分なる一思想に在る。

以上述ぶる所に依れば、スミスに於ける分配に關する論議は、何れも其の價格論を前提とするものであつて、分配論は其の結果として現はれて居る。併し乍ら此の事は後に述ぶるが如く、必ずしも、彼れに於て、價格の決定が分配率の決定に先だつものあることを意味しない。資本主義的經濟組織の下に於けるあらゆる經濟現象を以つて、動かすべからざる一の自然現象と觀念した彼れにとつては、此の組織の下に於て行はるゝ分配の自然率に對して、疑念を懷くが如きことはあり得ない。即ち彼れに従へば、『あらゆる社會若くは其の附近には、勞賃及び利潤の通常率若くは平均率がある。此の率は……一は社會の一般狀態に依り……、一は各々の仕事の特別の性質に依つて左右せらるゝ』<sup>15)</sup>ものであつて、此は又其れ等の自然率とも謂はるゝ。而して商品の價格が、是等各々の自然率に相當する場合に、之を以つて其の自然價格と做すものなるが故に、自然價格は、分配の自然率に依つて制約せらるゝものである。即ちスミスに従へば、資本主義的經濟組織の下に於て行はるゝ所の分配の自然率が、價格を決定する條件となるものであつて、形式上には價格論を前提とする彼れの分配論が、實質上には其の價格論の前提となつて居る。

15) Wealth of Nations, Bk. I, Ch. VII, p. 57.

### 三 價格の構成部分と分配論

價值乃至價格に關するスミスの所論は、彼れの理論中、最も不完全にして不明瞭なりとせらるゝ所なるが、想ふに此の事は、必ずしもスミスの不明を示すものではなく、偶々彼れが、總ての問題に對して、徹底したる觀察と、根本的の思索を加へたる一證左と做すべきものであらう。彼れは先づ第一に、價值と勞働との間に、密接なる關係の存することを觀たるが、遂に最後に至るまで之を支持すること能はずして、投下勞働に代ふるに分配勞働を以つてし、勞働價值説を去つて生産價格説に就いた。即ちマルクスの批評せる如く、『アダム・スミスは確かに、一商品の價值をば、それに含まるゝ勞働時間に依つて決定したが、併し彼れは、此の原理の實際の適用をば、アダム以前の時代に押しやつた。換言せば、單なる商品の見地より見て眞理なりと思はれたものが、資本、賃勞働、地代其他のより、高度なより複雑な形式が起り來るや否や、不明瞭となつて來た<sup>16)</sup>のである。

茲に於て、スミスの第一命題が表はれる。あらゆる商品の價格は、勞賃利潤及び地代の三分に分解するとの命題は、それ自身に於て、必ずしも勞働價值説と矛盾するものではない。社會的に必要なる勞働時間に依つて決定されたる價值は、支拂勞働の價值即ち勞賃と、不拂勞働の價

16) Karl Marx, Critique of Political Economy p. 67.

値即ち剩餘價值とに分解さるゝ。マルクスも謂へるが如く、『地代は、地主の手に入る前に、借地人即ち産業資本家の手に入らねばならぬ。従つて地代は利潤と共に、剩餘價值の構成部分に過ぎぬ。……それ故に、アダム・スミスに従ふも、總ての商品の價值は、可變資本及び剩餘價值 ( $V+N$ ) に分解さるゝ』<sup>17)</sup>のである。

偕て、茲に問題となるは、商品の價值が果して  $V+N$  の二部分にのみ分解さるゝものなりや、若くは他に何等かの價值部分を含むにあらざるやの點にある。スミス自身も、『労働者が原料に加へたる價值は、此の場合、二つの部分に分解する』<sup>18)</sup>と謂へるを見れば、原料の價值は、是等の構成部分以外に含まるゝ様に見える。『例へば穀物價格の中、一部分は地主の地代を支拂ひ、他の部分は勞賃……を支拂ひ、……而して第三の部分が、農業家の利潤を支拂ふ』<sup>19)</sup>のであるが、併し此の場合にも亦、此等の三部分の外に、『第四の部分が、農業家の資本を回收するためが必要であると考へらるゝ』<sup>20)</sup>併し乍らスミスに従へば、此の第四の部分も亦、結局は同様の三部分に分解される。即ち『農家の道具——例へば勞馬の如き——それ自身も亦、同様の三部分より成る。其の馬が飼養せられた土地の地代、之を飼養する勞働、及び農業家(飼養家)の利潤是である』<sup>21)</sup>それ故に、『全體の價格そのものも、直接にか間接にか、地代勞賃及び利潤の同じ三部分に分解する』<sup>22)</sup>と主張する。

17) Karl Marx, Das Kapital, Bd. II, Kap. XIX, S. 345.

18) Wealth of Nations, Bk. I, Ch. VI, p. 50.

19) 20) ibid., Bk. I, Ch. VI, p. 52.

21) 22) ibid., Bk. I, Ch. VI, p. 52.

併し乍ら此の事は、マルクスも謂へるが如く、一の『遁辭』に過ぎない。『アダム・スミスは、尙ほ此の外に、生産に消費されたる生産財の價格を含むことを附言すべきを忘却した。彼れば、一連の生産より第二の生産へ、更に第三の生産へと、導いて行く』<sup>23)</sup>のみで、一難を避けんとして、他難を導いたものである。此の如き遁辭は、最後に於て労働のみに依る生産物の存在を證明せざる限り、許されざるものなるが、此は唯概念的にのみ許さるべき事項に過ぎぬであらう。

此の如くスミスが、不變資本の價值分を逸したる理由は、『年々の生産物の價值と、年々の價值の生産とを同視した』<sup>24)</sup>點に存する様である。後者は、單に其の年に於ける労働の所産に過ぎないが、前者は、之に加ふるに、其の生産に要したる生産財の價值をも含むものであつて、此の生産財の價值は、其の年の労働に依つて生産若くは複生産せられたものではなく、過去の労働に依つて生産せられたものが、單に再現したるに過ぎぬ。

而してスミスが此の如き誤謬に陥れるは、マルクスに従へば、其の根本に於て、労働それ自身に存する二重の性質を區別せざるに依る。即ち労働は、一面に於ては、労働力の具體化に依つて交換價值を創造すると同時に、他面に於ては、有用労働として使用價值を創造するものなるが、スミスが『年々の労働』と謂へる場合には、常に使用價值を創造する一面のみを觀る傾向がある。成程、『年々の全生産物は、其の年の間に用ひられた有用労働の結果ではあるが、併し此の

23) Karl Marx, Das Kapital, Bd. II, Kap. XIX, SS. 347-348.

24) Karl Marx, ebenda, Bd. II, Kap. XIX, S. 350.

年生産の價値の一部分のみが、其の年の間に創造されたのであつて、此の部分が即ち、價値の年々の生産である。……然るに彼れは、此の事が、豫め供給されたる勞働手段、原料の補助なくしては、不可能なることを忘れ、従つて「年々の勞働」は、其が何等かの價値を創造する限り、それに依つて完成されたる生産物の價値全體を創造するものにあらざることを忘れ、價値の生産は、生産物の價値よりも、より小なることを忘れたのである。<sup>25)</sup>」

資本主義的生産方法にありては、勞働者は、商品として其の勞働力を資本家に賣付け、資本家は、之を買取ることによつて可變資本として利用する。此の勞働力の賣却は、此の生産方法に於ける生産行程の開始であつて、同時に其の特質を決定するものである。かくの如くして起つた生産行程の中に於ては、價値の單なる保存と、前拂されたる勞賃の複生産と、剩餘價値の生産とが實現される。従つて資本主義的生産方法に依つて生産されたる商品の價値には、第一に不變資本の價値分を含み、第二に可變資本の價値分を含み、第三に剩餘價値分を含むものなるが、<sup>26)</sup> スミスにあつては、遂に此の第一の價値分を逸することとなり、延いて後に述ぶるが如く、國民の間に分配さるべき國民所得に關する明確なる考察を缺くこととなつたのである。

スミスの第二命題は、年々の全生産物の價値が同様の三部分に分解せられ、これが國民の收入

25) Karl Marx. ebenda, Bd. II, Kap. XIX, S. 351.

26) Karl Marx. ebenda, Bd. II, Kap. XIX, SS. 361-363.



として、各階級の間に分配せらるるといふことなるが、茲に一定の年の生産物の價値に就て謂ふ場合、果して其の價値全體が、國民の收入として役立つものなりや、換言せば、國民の收入として各階級の間に分配さるべき國民所得の實體は、果してスミスの謂へるが如く、其の年に於ける生産物の全體なりやの問題が起る。謂ふまでもなく、國民所得の實體を構成するものは、其の年に於ける生産物の中、生産財を控除したる部分、即ち享樂財の全生産なるが、價値の分解に於て、複生産の行程に注意せざりしスミスにありては、既に述ぶるが如く、不變資本の價値分を逸することとなり、従つて國民の間に分配さるべき國民所得は、此の不變資本分を除外すべきものなることをば、十分明らかにし得なかつたのである。

今『單純複生産』の場合に於て、二種の産業に就て見るに、<sup>27)</sup>

I 4000<sub>0</sub> + 1000<sub>0</sub> + 1000<sub>0</sub> = 6000 生産財

II 2000<sub>0</sub> + 500<sub>0</sub> + 500<sub>0</sub> = 3000 享樂財

とすれば、第一種生産物の價値 6000 の中、可變資本の價値分及び剩餘價値分 1000<sub>0</sub> + 1000<sub>0</sub> = 2000 だけは、個人的收入となれども、社會的收入とはならず、従つて此の種の生産物の全價値 6000 は、國民所得より除外さるべきものである。次に第二種生産物の價値 3000 の中、不變資本の價値分 2000<sub>0</sub> は、個人的收入とはならざれども、社會的收入となり、従つて此の種の生産物の全

27) Karl Marx, ebenda, Bd. II, Kap. XX, S. 372. und Bd. III, Kap. XLIX, S. 374.

價值 3000 は、すべて國民所得の中に包含さるべきものである。即ち右の場合に於て、國民の間に分配さるべきものは、第二種の生産物 3000 のみであつて、全體の生産物  $6000 + 3000 \parallel 9000$  ではない。而して此の分配さるべき 3000 は、兩種の生産に於ける個人的收入の總和、即ち可變資本と剩餘價值との和、 $1000_w + 1000_m + 500_w + 500_m \parallel 3000$  に相當するもので、此點より見れば、兩種の生産物全體の中より、不變資本の價值分  $4000_w + 2000_m \parallel 6000$  を除外せるものである。スミスは實に、此の點に關する考察を缺くものであつて、マルクスも謂へるが如く、『復生産及び蓄積の過程に關する叙述に於ては、アダム・スミスは、其の先人特にフイジオクラートに比し、多くの點に於て、單に何等の進歩を示さざるのみならず、著しき退歩をなした』<sup>28)</sup>とも謂ひ得らるゝであらう。

併し乍らスミスも亦、後に至つて、資本に關する理論を考察する場合、到底この點を看過し得なかつた。『總收入』と『純收入』との區別即ち是である。スミスは謂ふ、『大なる國家の總ての住民の總收入は、彼等の土地及び勞働の年々の生産物全體を包含する。純收入は、第一に固定資本を、第二に流通資本を維持する費用を控除したる後、彼等の自由に委せらるゝもの、若くは彼等の資本を侵害することなくして、彼等が直接消費のために留保したる基金の中に、入れ得るものである。』<sup>29)</sup>と。即ち茲に謂ふ所の純收入とは、年々の生産物の中、『資本を侵害することな

28) Karl Marx, ebenda, Bd. I, Kap. XII, S. 554. fuss-note.

29) Wealth of Nations, Bk. II, Ch. II. p. 270.

くして』彼等の直接消費の基金となり得るものであつて、生産物の全價值より、資本を控除せるもの、換言せば、全生産物の中、享樂財に屬するものである。即ち價值の一部分には、勞賃としても利潤としても地代としても分解されずして、資本として分解されるものあることを認め、さうして此の部分は、『常に資本として役立ち、決して收入として役立つものでない』<sup>30)</sup>ことをば、暗々裡に承認せざるを得なかつた。故に『若しもスミスにして、商品の價值に關する問題を研究せる際に於ても、彼れが後になしたる如く、復生産の全過程に於ける、價值の各構成部分の任務を研究したりしならば、價值の或特定部分が收入として役立つに反し、他の部分が永久に資本として役立つものなることをば、明かにし得たであらう——さうして此の論理に従へば、此の後の部分も亦、同じく商品の價值の構成部分として認めらるべく、』<sup>31)</sup>従つて國民の收入として各階級の間に分配さるべき國民所得は、此の部分を除外すべきものなることを悟り得たであらう。

最後にスミスの第三命題——勞賃利潤及び地代は、收入の根源であると共に、總ての交換價值の根源である——は、彼れの價格論と分配論との關係に於て、最も注意すべきものである。是等の三者が收入の根源なることに就ては姑く別とし、是等が交換價值の根源なりとなすに至つて、彼れの價格論は、本末顛倒に陥つたと謂はねばならぬ。彼れは最初に於て、商品の價值は、是等

30) Karl Marx, ebenda, Bd. II, Kap. XIX, S. 342.

31) ebenda, Bd. II, Kap. XIX, S. 363.

の三部分に『分解する』(resolved into)と謂ふ。此の場合、價格は主であつて構成部分は従である。然るに彼れが無造作に之と同じ意味に用ひたる、商品の價格は是等の三部分に依つて『構成せらる』(composed of)との言葉は、既に、此の本末關係を曖昧ならしむるものなるが、遂に最後に至つて、全く此の關係を顛倒して、構成部分を主とし、價格は之に依つて規制せらるゝことゝなつた。即ち『或商品の價格が、土地の地代、労働の賃銀及び……資本の利潤をば、是等の自然率に従つて支拂ふに足る所のものよりも、多くもなく少くもない場合には、商品は、其の自然價格と呼べるゝ所のもので賣らるゝ』<sup>32)</sup>のであつて、『自然價格そのものは、其の各構成部分……の自然率と共に變化する』<sup>33)</sup>ことゝなり、最後に、各構成部分は『總ての交換價値の根源』となつてしまつたのである。換言せば『商品の價値が収入の根源たる代りに、収入が商品の價値の根源』となつて、商品の價値は、種々の収入を以つて集成せらるゝ様に見える。是等の収入は、相互に獨立して決定せられ、従つて商品の價値全體は、是等の収入の價値程度の増加に依つて決定せらるゝ』<sup>34)</sup>に至つた。

寔にマルクスの批評せるが如く、一定の長さの直線を三分することゝ、一定の長さを有する三直線を合して一直線を作ることゝは、同一でない。前の場合、部分は全體に依つて決せられ、後の場合、全體は部分に依つて決せらる。スミスは前者より出發して、遂に後者に至つたものであ

32) *Welath of Nations*, Bk. I, Ch. VII, p. 57.33) *ibid.*, Bk. I, Ch. VII, p. 65.34) *Karl Marx, ebenda*, Bd. II, Kap. XIX, S. 357.

る。即ち彼れに於ける價格論は、その分配論が惹き出さるゝ前提をなしては居るが、併し實際に於ては、各個人の間に分配せらるゝ各收入の大きさが先づ決定して、然る後、是等の收入の結合に依つて價值の大きさが決定さるゝことゝなつたのである。

然らば、何故にスマイスが此の如き轉化をなすに至つたのであらうか？ 想ふに此はスマイスの根本的立場に由來するものであらう。既に述べたる如く、彼れにあつては、資本主義的經濟組織及び之に伴ふ生産過程は、絶對的のものとして觀せられ、之に對立する所の社會主義的經濟組織及び之に伴ふ生産過程は、彼れの全く想到し得ざる所であつた、従つて彼れにあつては『生産過程に於ける種々の要素は、……最初より資本主義的生產過程の特徴を以つて現れた。従つて商品の價值に關する研究は、一面に於て、此の價值の中如何なる程度までが、投資々本の等價であるかを考へ、他面に於て、如何なる程度までが、剩餘價值を成すかを考ふることに一致する』<sup>35)</sup>のである。此の見地よりする時は、自然に價值の各部分の大きさを重視することゝなり、延いて各部分は、不識の裡に、獨立的の『構成部分』として考へらるゝに至り、最後に總ての交換價值の『根源』として現はるゝに至り、其の結果、各人の收入が、商品の價值より成る代りに、商品の價值が、各人の收入より成ると考ふるに至つたものであらう。

## 四 結 論

分配論に於て取扱ふべき重要な問題は、第一に、國民の間に分配さるべき國民所得の實體は何か、第二に、其が如何なる方法若くは過程に依つて分配せらるゝか、第三に、其が如何なる割合を以つて分配せらるゝか若くは此の割合を決定する諸事情は何かの問題なるが、是等の問題は、以上述ぶる所に依りて明らかなる如く、何れもスミスに於て既に取扱はるゝ所である。併し乍ら、其は分配問題としての特別の意義を以つて、獨立の地位に於て研究されたものではなく、何れも價格論の中に包含せられ、其の一部として存在するものである。此の意味に於て、彼れの價格論は、分配論の前提となつたもので、殊に價格の構成部分なる一思想は、彼れに於て所謂分配の比例及び方法が論せらるゝ機縁をなして居るものである。併し乍ら此の事は、單なる形式上に止まるものであつて、仔細に吟味する時は、却つて反對の結論に到達する。即ちスミスにあつては分配が先であり、價格が後である。詳言せば、資本主義的經濟組織の下に行はるゝ分配状態に依つて規制せらるゝ各階級の収入をば、絶對のものとして認識し、此の前提の下に立つて、其の價格論を構成したのである。此の如く見る時、スミスの立場は最も明白に看取せらるべく、同時に個人主義經濟學の鼻祖たる彼れの一面をば、髣髴せしむるに足るであらうと信する。